

---

「merchant of death 死の商人」

A5

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「merchant of death 死の商人」

### 【Nコード】

N1575E

### 【作者名】

A5

### 【あらすじ】

麻薬に頭を犯された少年は、知らないうちに危険な世界へと巻き込まれ。気がついた時には抜け出せない状況に陥ってしまった。

## 赤い一話（前書き）

過度ではありませんが、狂った表現や暴力的なフレーズが見え隠れします。

苦手な方はご注意を。

## 赤い一話

ああ、やっと死ねるんだなあと思った

こめかみにひんやりした銃口を突きつけられて、正直に気持ち良いなと思った

今に、その魅力的な小さい穴から黒光りする弾が飛び出して、腐りきった俺の脳を飛び散らせる

俺の血の色って赤いかな？ いや、黒いかも 違うな、きっと緑だ

笑いが止められない クスクスと笑ってしまっただけ俺を殺そうとしてくれた相手に失礼だ

少しは怖がる態度でも見せた方が良くないかな？ それが礼儀って奴なのかもしれない

世間の礼儀ってやつは良く解らないけど、今は怖がった方が可愛気ある男に見えるんだろうなあ 助けてとか言ってみようかなあ 可愛い奴だって思われたいなあ

デモなあ、笑いが止まんねー

どうしよう、すげえ……

すげえ楽しい

「赤い」

銃を持つ咎人は言った。壊れかけた廃墟と飢え死にしたネズミの転がる素敵な夜景の中、ポツリと生み出された言葉はそのまま消えた。銃を突きつけられた青年は、咎人の言葉を汲み取る事無く、至福の時は今かと薄ら笑って大人しく待っている。

ハチドリが二百回羽ばたく程の間を置いてから、青年は思い出した様に口を開いた。

「何が？」

「君の髪、此处赤い」

黒き影に隠された咎人の目がギョロリと動き、未だ笑顔のままの青年を舐める様にジットリと見つめる。咎人が口を開くたびに血にそまつた様なショッキングレッドの口が形を変えて、音色の様な声を作った。その赤といえ、毒蜘蛛が体に貼り付けた警告色の様だ。

俺に近づけば死んじゃうよ。この鋭い牙で噛み付くよ。毒はね、体中にまわって血液の流れを遅くしちゃうんだ。きつと初めは苦しいよ。けどだんだん気持ちよくなってくるから。頭がボーっとして、とっても気持ちいいよ。ほらほら、噛まれにきなよ。毒で死んじゃうよ。噛まれにきなよ。

毒蜘蛛が軽快にステップを踏みながら咎人の横で踊っていた。可憐な声で誘惑し、自堕落なセリフで心を揺さぶった。

「あー。なんだあ髪かぁ。血の話しかと思った。俺さぁ、気がつかないうちにもう撃たれたのかって勘違いしちゃった」

悪戯な笑いを含んだ声で返答しながらも淫靡な青年はすぐに蜘蛛の姿を追うようになり、とうとう自分から毒を流されにいった。

赤い赤い警告色に卑猥な妄想を膨らませ、蜘蛛に噛み付いた。

咎人はギョロリとした大きな目をよりいつそう大きく見開いた。震撼した咎人はいきなり唇に噛み付いてきた青年を足で蹴り飛ばす。精悍に口を拭った咎人は青年に叱咤をするべく銃口を向けなおして彼の眉間を狙う。蹴り飛ばされた腹を押さえながら、青年はさっきまでの人懐こそうな笑顔をやめて攻撃的な視線を暗闇に隠れる咎人の顔へと送らせる。

「何すんだぁ……？ あんたが誘ったんだ。噛まれにきなよって言ったろ？ 言っただじゃん」

独り言のように呟きながら、青年はクルクルと表情を変えた。不安気な顔をしてみたり、クスクスと屈託なく笑って見たかと思えば、次の瞬間には親の仇にでも会ったかのような憎悪を露わにしている。

「麻薬の味がする。頭がやられたのか？」

## 二話：犯された彼

青年は麻薬常習犯だった。ありもしない幻覚に惑わされ、聞こえない幻聴に返事を返す程に青年の頭は薬に犯されてしまっている。今も彼のポケットには飲み薬タイプの麻薬がどっさり入っている。ついさっき売人を蹴り殺して手に入れた代物だった。

「お前も俺を馬鹿にすんのかあつ。麻薬も止められないダサイ男だと思つてんだろーがつ。さっきからずっと俺のこと見下ろしやがつて、死ね、カスッ」

咎人は一度も青年を見下ろしてなどいない。それどころか、頭ひとつ分程背の低い咎人を見下ろしているのは長身の青年の方だった。しかし、そんな正論を述べたところで青年に伝わるはずが無い。一から十までとしたのなら、三ぐらいまでは伝わるだろうか？ それでも、咎人が丁寧に根気良く青年と話を続ければの話だ。もちろん咎人にはそんなことをしてやる義理も無ければ、義務もない。それでも、咎人は一つだけ青年に対する感情を持っていた。

ギョロリとする目が、また青年の体のラインにそってゆっくりと動いた。

綺麗な人だ

咎人は美しいものが好きだった。



汚れた自分の人生を塗りつぶしてくれそうな「美」をいつも探し回っていた。

今夜も仕事帰りにたまたま通りかかった路地で、この青年が走って何処かへ消えて行く姿を見つけ、美しいと思ったから織ってきた。

青年が何かから逃げる様にして入り込んだのは、光で溢れた繁華街からさほど遠くない大きな廃墟。月明かりが何本も細く差した部屋に落ち着くと、ネズミの死骸を踏みつけながら中央にあるソファまで歩いていき、グッスリと寝入ってしまった。

整った顔が安心しきった寝顔をさらすと、まもなく咎人が足音を立てずに部屋へ無断侵入をしてくる。美しい顔を近くで見ようと吐息が聞こえる程に近づいた咎人は、ますます彼の美の虜になっていた。

黒髪の中に一筋際立つ赤いメッシュが入った髪を素敵だと思い、指を滑らせてみてがっかりした。ろくな手入れもしていないのである。う青年の髪は、素敵なのは形だけで、良く見れば痛み放題、枝毛もたくさん見つかった。もし自分なら、こんなに美しい容姿を無駄にしないよう、毎日丁寧で細やかなケアを怠らないのにと心の中で悪態をついた。

それでも、咎人の心は晴れやかだった。少なくとも仕事を終えた時の状態と比べれば、今は比べ物にならないほどに快調だ。美しいものは心を洗ってくれる。咎人は小さく美しい人へ礼を述べ、そつと傍を離れた。

最後にもう一度だけ青年の顔を見ようと、出口付近で振り返って驚いた。青年はへらへらしながら咎人の後をピツタリくっついて来ていたのだ。

咎人のプライドが傷ついた。

仕事柄、気配を察知するのは得意なはずなのに、いとも簡単に見ず知らずの男に背後を取られたのだ。短い舌打ちと共に、この青年を撃ち殺すつもりで銃を素早く構えた。

それなのに、引き金にあてられた指は咎人の命令を無視して、伸縮を止めた。

銃を向けられた青年は恐怖に凍りつくか、または急いで逃げ出すだろうと思った。

しかし彼は銃に気がつくとしばらく考えるように小首をかしげ、やがて自分から顔を横にしてこめかみを突きつけてきた。薄っすらと笑顔さえ見せて。

結局まだ死ねない青年は今ヒステリックに奇声を上げたまま、頭を抱えてブンブンと振っている。まるで、ロックバンドに良く見られるヘッドバッキングの様だ。おまけにボーカルさながらにシャウトまでかましているのだから、もうそれにしか見えない。

しばらくそうしていると気分が落ち着いたのか、パツと顔を上げて自分を狙う銃口に笑いかけた。まるで恋でもしているかのようにそつと手を差し伸べて、指で銃口をなぞっている。

「チョーダイ」

子供のように片言で一言言った青年は、キラキラと目を輝かせてご機嫌に振舞っている。

ちようだいとはつまり、引き金を引いてくれという意味なのだろうか？ それともこの銃自体が欲しいのか。

どちらにしろ、もう咎人には青年の願いをかなえてやることのできなさそうだ。

殺すこともできない。銃も渡せない。

### 第三話：拉致監禁

早々にこの場から立ち去ろうと、咎人は砂利を踏みつけながら一步を引いた。しかし、青年はそれを許すまいと咎人に抱きつき、必死に置いていくなと駄々をこね始める。

仕事柄、そんな青年を一人押しのけるくらいは余裕のはずだ。それでも咎人は青年の美にあてられて体を上手く動かせなかった。長く無言で抱きつかせてやっていると、咎人は新しい事に気がついた。青年の服は髪と同じで見た目だけが良く、実際は生地も薄い安物で、こんな寒い季節には辛いであろうと思われる代物だった。ついでに言えば、香水のセンスもあまり良くない。きつすぎる匂いに、咎人は眉を寄せた。

もし、自分だったらこんな容姿を無駄にしない行動をとるのに。自分に任せれば、この人はもっともっと美しくなるに違いない。ずっと探していた最高の美に出会えるのかもしれない。

気づけば咎人は、青年を廃墟から連れ出していた。逃がさないようにしっかりと手を握り締め、足元がおぼつかない青年をグイグイと引っ張り、自分の家へ連れ込んだ。

まず何から始めさせるべきだろうと咎人は自問した。お気楽な青年はやはりへらへらと笑いながら、めずらしそうに家の中を行ったり来たりしている。何に興味を引かれたのか解らないが、何度もトイレのドアを開けていた。

奇行を繰り返す青年を見つめているうちに、まずは薬を止めさせる事からだと思がついた。咎人は青年のもっとも興味を引く物。銃を

餌に自分のところへおびき寄せた。チラチラと銃を見せれば、青年は嬉しそうに寄ってくる。目の前で行儀良く座り込み、愛らしい笑顔で殺してくれるのを待っていた。

咎人は青年の額に銃口を当てながら自分もしゃがみこみ、話しかけて意識をそらしながらそつと薬が見え隠れするポケットに手をつ込む。全てを抜き取ると、ソレを全て自分の懐へと隠し、銃もしまった。楽しい玩具を取り上げられて、青年は不機嫌に床を何度も叩いたが、咎人は銃を出さなかった。薄暗い部屋の奥へ一度引つ込むと、錠剤を持って青年によってくる。

「撃ってー。撃ってえつ。俺のこと早く殺しちゃえよ」

人事のように死の催促をする青年は、咎人の脚にすがりつき、黒いスーツが破けそうになるくらい滅茶苦茶に引っ張っている。

「やめる、醜い。それよりもこれを飲め」

冷たくあしらった咎人の手には白い錠剤が二つチョココンと乗っていた。

一つは青年の所持していた麻薬と極似したもの。もう一つは睡眠薬だった。仕事柄薬も良く扱う咎人は、青年の麻薬と良く似た少し効き目の薄い麻薬と、落ち着かせるための睡眠薬を持ってきたのだ。少しずつ薄い薬に変えて麻薬をやめさせようと試みた咎人の判断は、壊れかけた青年に受け入れてもらえたようだ。もとい、彼は何も意味がわかっていないのだろうか……。

ぐっすり寝入った青年にかけ布団をしてやると、咎人も寝室へ姿を消した。

床にごろ寝をしていた青年は翌朝早い時間に目が覚めた。痛みを覚える腰をさすりながら、朦朧とする意識で此処は何処だろうと考えた。しかし、それよりも薬を飲みたいと思い、ポケットに大量に入っていたはずの麻薬を探した。しかしポケットの中身は空だ。なぜ

かワインのコルクが一つ入っているくらいで他には何も入っていない。そういえば昔、自分の排泄物からコルクが出てきた時は驚いた。薬と間違えて飲み込んだのだろう。不機嫌にコルクを部屋の隅へ投げつけると、青年はポケットを裏返しにしながら再度薬を探した。

「あー…れーえ？」

いつも薬が切れる前に補充作業を行っていたはずだ。探したときに薬が無いなんてことはなかった。仕方なく、青年は本題に戻ることにして周囲を見回した。この嫌に片付いた部屋はなんなんだろう？ 鼠の死骸一つ落ちていない、整理された部屋は汚れなど少しも見つからなかった。自分がいるだけでこの部屋を汚しているような気になって、青年は居心地が悪そうに立ち上がる。

部屋を出て廊下に出ると美味しそうな匂いが漂ってきた。こんな匂いは久しぶりに嗅いだ。最後は確かレストランの裏手で金持ちを恐喝したときだっただろうか？ 匂いに誘われるままに足を進めると、やはり綺麗に片付いた台所にたどりつく。そこでは見ず知らぬ人物が大量の食材を料理に変えている真っ最中だった。

「よく寝ていたな」

青年が話しかけるよりも早く、その人物が背を向けたまま切り出してくる。茶髪のショートカット。後ろからでは女性なのか男性なのか解らなかったが、彼女の声は涼やかで、男の硬骨な声とは違った。まずまず青年は訳がわからなくなってきた。自分にこんな女友達がいただろうか？ 煙で声がつぶれた女性や、幼い時からの薬の服用で妙に背の低い女性、金のために片目を売ってしまった女性等などのたぐいならそうそう不思議でもなかったが、見たところ彼女は常識人の様だ。この場所も、間取りから高級アパートのたぐいだと解ったし、少なくとも人生をだらしく生きている部類の人間では無いだろう。

青年は彼女へかまをかけてみた。

「昨日は楽しかったな……よな？」  
「なんの話だ」

はずれ。んー。と声を漏らしながら青年は苦悶の表情を見せた。

誰だよ、こいつ。あー、もー。薬飲みたい。此处何処？ 料理美味そう。

もともと麻薬に犯された脳が正常に機能を活躍させるはずもないのだ、たとえ彼女と面識があつたとしても考えるのは無駄だろう。頭で理解できなくても、経験で十分理解できていた青年は素直に白状しはじめた。

「ねー。俺、あんたのこと覚えてないんだけど。俺とあんたって寝たのかなあ？」

青年の人間分類はそれしかなかった。寝た奴と寝てない奴。

「キスをした」

「あー、寝たの。じゃ、お友達か」

「それだけだ」

「んー。えー。うそー」

人間分類が二項目しかない青年にとってこれは大問題だった。また苦悶に喉をうならせる。

それでもやはり、一つのことを長く考えていられない青年はしばらくするとキョロキョロと辺りを見回し突然見え始めた小鳥さんを目で追った。小鳥さんはダイニングテーブルの料理を美味しそうにいばみ、楽しそうに歌を歌っている。

「で、俺は朝ご飯を一緒にさせてもらっていいんですか？」  
言いながら返事をまたずに、青年は一つ焼きたてのパンを取り上げた。

今しがた出来たばかりの料理を持ったまま振り返った女性は、返事も待てない青年にあきれたようなため息をついて、どーぞと短く答える。

配色も考えられた久々の朝ご飯を、青年は嬉しそうにたいらげた。そうしてやっと落ち着いてきた腹を押さえながら、女性のついでくれたコーヒを一気に飲み干すと、椅子に背中を押し付け大きく伸びをする。

「あんた良く見たら良い女」  
上に思い切り伸びあげさせた手を下ろしながら、突然青年がそう言った。女性はたいして興味がなさそうに終わった皿の片づけを始めている。

「じゃ、とりあえず体力もついたし、俺とお友達になつてこーか？」  
青年にしてみれば根気良く話しかけた方なのに、女性は未だ皿を片付けている。青年は話しかけることをあきらめ、ボーっと女性の行動を見ていた。

いつもならば一人分の皿洗いだが、今日は二人分。女性はほんの少し予定時間をオーバーして皿を片付け終わる。ダイニングテーブルを拭こうと布巾を持ってまた青年の傍まで戻ってきた女性は同時に白い薬も持ってきた。

「あら。あんた普通の人じゃなかったんだ？ こんな危ないもん持っていちゃいけませんねー。片付けてやるから感謝しな」

女性が飲めと言う前に、青年は女性から薬を奪い取った。自分の薬を彼女に取られたとも知らずに、青年は得したかのような表情を作って見せる。口の中で麻薬を転がし、噛み砕いた青年の目がトロンとしてくる前に、女性は話を切り出した。

「お前に帰る所はあるのか？」  
素直に帰るところがあるのなら帰してやろうと思っていた。そして反面、帰るところが無いのなら、青年を絶対自分の着せ替え人形に



してしまおうとも企んでいた。この女性もまた、墮落した人間だったのだ。青年の思うような正常で普通の人間では消して無い。彼女の淫乱なる裏の思考に気がつくことなく、青年は素直に無いと答えてしまった。

「昨日まで置いてくれる先輩いたんだけどさー。しくつちゃって、追い出されちゃった」

「交換条件で此处に置いてもいい。行くところが無いのなら考えてみないか？」

だいぶ薬が効いてきて、虚ろな目を見せ始めた青年は特に考えることも無くいるいるー。と答え、へらへら笑ってみせた。交換条件という言葉が本当に聞こえているのだろうか？

「条件だ。お前の髪型、服装、爪の一枚にいたるまで身の回りの事は全て私がやる。お前は素直にそれに従うだけで良い」

理解するために頭をどう処理して良いのか解らず、青年は少しの間困った顔をしていたが、やっと意味が解るとギョツとして身を引いた。

「は？ あんた変態？ やだね。そんな囚人生活。俺は好きなように生きて、好きなことをして過ごしたいんだ。はい、交渉決裂、止め止め、さようなら、お元気で」

麻薬が効いてきた青年は少し攻撃的な態度で椅子から離れ、玄関のドアを開けっ放しで出て行ってしまった。

女性は焦った顔を見せるでもなく、そのまま普通に仕事へ出かけて行った。

女性が真夜中になって帰宅すると、青年が玄関先で座り込んで待っていた。

「寒い、遅い、腹減った、飯作れ」

青年の声は低く、酷く機嫌が悪そうだ。女性は青年の前で初めて笑顔を見せる。それも、勝ち誇った嘲笑の笑みだった。青年の機嫌は

さらに悪化し、勢い良く立ち上がると女性の黒いスーツの襟を思い切り引っつかみ、自分の方へ引き寄せる。

「何が可笑しい？ お前が身の回りの世話するつつったんだろ？  
それから薬よこせっ」

青年の機嫌が悪いのは麻薬のせいだった。いつもならすぐに見つかるはずだった麻薬の売人が今日にかぎって全然見つからないのだ。偶然出会った麻薬仲間に尋ねると、どうもこちら辺一帯に変な噂が出回っていると言う。売人を食い物にしているグループが出来ただとか、麻薬を手に入れるためなら手段を選ばずに片っ端から殺しをしている奴がいるだとか、警察が嗅ぎ付けておとり捜査を行っている真っ最中だとか……沢山ある噂の中からいくつかは思い当たるふしもあったが、そんな噂だけで売人が忽然と姿を消してしまうなど珍しいことで、青年には解決策も無かった。麻薬を持っていた彼女のところへ転がり込むこと以外には……。

女性はやんわりと青年の手を離すと、玄関のドアを開けて先に入る。後からついてきた青年に振り返り、また開けっ放しのままにしようとした青年を叱咤して台所へ向かった。ピツタリくつついてくる青年は繰り返して、薬をよこせと催促している。

売人が街から姿を消した原因がこの女性にあると、青年は気がつくはずもなかった。昨日、青年が女性の家で寝入った後、この青年を事実上の上で拘束するために女性はテキパキと事を進めていたのだ。仕事のつても使って、売人達に変な噂が流れる様に仕組み、青年が麻薬を簡単に手に入れられない様に仕組んだ。罠にはまった獲物は今こうして自分の後ろをのこのことついてきている。次に女性がすることは餌付けだった。

「お、解ってらっしゃる。女王様」

涼しい顔で、女性は胸ポケットから麻薬を取り出した。飢えた獲物はギラギラした目で餌に食いつき、自ら女性の罠の深みにはまって

いく。

「食事を作る。その間にシャワーを浴びて来い。お前の髪は恐ろしくくらいに痛んでいるから、ダメージケアのシャンプーを使い。その後にトリートメント剤をなじませて、次にコンディショナーを…」

「……ん？」

間の抜けた声が廊下に響いた。冗談や、反抗などではなく、本気で解らなかった青年は目を開いてポカンと女性を見つめている。初めての命令は、少し青年にとって難しかったようだ。女性は風呂のドアを開け、言い方を変えた。

「右から順番に使えば良い。最後のは使うな。三つ目までだ」

「あー。うんうん。あ、そう。解った解った」

女性の会話についていくことが面倒くさくなったのだろう。あきらかにその場しのぎの返事をするスタスタと浴室に入っていく。青年がドアを閉めたかと思うとすぐにまた開いて、ひょっこり愛くるしい笑顔が出てきた。

「なんか良くわかんないから、一緒に入ろっか？」

「馬鹿を言うな」

女性は勢い良く浴室のドアを閉めなおした。ゴンと派手に音が聞こえたから、青年が頭をぶつけてしまったのだろう。女性はかまわず台所の方へと姿を消した。

#### 四話：醜い女性

料理は女性の数ある趣味の一つだった。彼女は何にでもめり込んでいくタイプで、一度始めた事は最後までやらないと気がすまない。そのため、この家の台所には膨大な種類の調味料だけでなく、女性が手を開いたくらい刃がある斧の様な包丁から、剃刀の様な小型包丁までズラリと並び、下手をすると石包丁まで見つけてしまいそうな勢いだ。

包丁と同じように多種多様の鍋から適切な物を一つ選び出し、それに下ごしらえの済んだ食材を丁寧に放り込んでいくと、魔法のように料理に変わっていった。

一人分だと何かと不都合の多い料理も今日からは二人分で良いのだと思うと、少し嬉しくなり気合も入ってくる。すでに出来上がった料理に女性はあらゆるトッピングを乗せて、出来上がったばかりの料理を次々にテーブルへ運んでいく。

何度かそうして最後の料理を運ぼうと思い、後ろを振り返った女性は絶叫をあげそうなくらいに驚いた。また、気配も無く半裸の青年がすぐ後ろでへらへらと笑っていたのだ。随分とさっきの麻薬が効いているらしい青年は、幼い子供のそれらしく、大きく両手を開いて女性に抱きつこうとした。だがそれを女性はさつとした身のこなしで交わすと、とりあえず料理をテーブルに置いてから、半裸の青年に敵視を向け大声で怒鳴った。

「私の背後に立つな。風呂上りにバスタオル一枚で出てくるな。着替えを置いておいたはずだ。今すぐ戻って着替えろっ」

「寒い」

そりゃそうだろう、青年はあまり気温の高くないこの季節に申し訳程度で身に着けたバスタオル一枚とびしょ濡れ姿で風呂場から寒い廊下を歩いてきたのだから。

女性はハタリとあることに気がつき、サッと床を見下ろしてみた。

予想道理に床は水浸しで、お気に入りの絨毯が水玉模様になっている。

「体を拭いてから出て来いっ。礼儀をしれっ」

女性の怒鳴り声がまた響き、情緒不安定な麻薬常習犯は悲しそうな顔でトボトボと元来た道を戻っていった。この調子だと廊下もびしょ濡れなのだろうと女性はため息をつき、雑巾をとり台所を出ると調度家の電話が鳴った。

「はい…」

「あーもしもし？ご近所の方から五月蠅いと苦情が来ているんですがねえ。もう少し時刻を考えてはいただけないでしょうかねえ？」その嫌味たつぷりの管理人からきた苦情に女性は慌てて平謝りをし、また大きいため息をついて悲しげに受話器を置いた。

此処はアパート。深夜に大きな音を立てるのは厳禁だ。

何故か女性があらかじめ用意してあった青年用の大きめのＴシャツとジーンズに彼は疑問をおぼえることも無く着替えて、タオルを頭からかぶるとのそのそと台所まで戻ってきた。

テーブルの上で美味しそうな料理が良い匂いをさせていたが、残念ながら青年は料理が温かいうちに手をつけることを許されなかった。

「ご飯ー。何すんだよー。食べたいー」

「その前にすることがあるだろう」

青年は台所へ入るやいなや女性に手を引かれ、リビングまでつれてこられる。皮のロングソファに座らされ、女性はドライヤーとなにやらスプレーのようなものを数本持つて来た。

腹が減ったとブーブー文句を垂れていた青年は、女性にかけてもら

うドライヤーが気持ち良いらしく、次第に大人しくなってきた、今度は蝶々さんが見えたと楽しそうに手を伸ばしていた。リラックス気分なのは青年だけでなく女性も同じだった。美しい物に目がない女性は、帰宅後に美人が出迎えてくれる事を内心激しく感動していたのだ。

蝶々さんを追って伸ばす細い腕も、のぼせてウル目の瞳も、高飛車を連想させる高い鼻も。全て女性の心を強く刺激する代物で、美しき原石に創作意欲が高まるばかりだった。感情を表に出さない女性は消していやらしくにやけたりなどしなかったが、悶々とフィギュアの手入れをするお宅さながらに髪を乾かしていた。彼がスカートをはいていなくて本当に良かった。もしはいていたら、きつとミニスカートをペロリとめくっていたかもしれないから。

まさか其処までしなかったとしても、仕事でためたストレス発散のためにこの美人さんをどうしてしまおうか……背後であられもない妄想を膨らませる女性に少しは青年も警戒をしたほうが身のためであるというのに、彼の心は蝶々さんなどというふざけた幻に夢中だった。

せっかく乾かした髪にスプレーを大量に吹き付ける女性が気になったのか、彼の意識がやっと幻から引き戻される。

「なんでまた濡らすんだー？　せっかく乾いたのにー。めんどくせえ奴だなー」

「こうすればいつそう綺麗になるからだ……大人しく前を向け。目に入るぞ」

もういいよー、と青年は細い腕を伸ばしてスプレーを一つ取り上げたのだが、女性は待ってましたとばかりにもう一本スプレーを取り出した。青年は苦悶の表情を浮かべ、戦利品のスプレーを手の中で遊びながら呟くように話しかけた。

「俺のこと綺麗にして楽しい？　俺、全然楽しくないんだけど」  
呟く青年の声はドライヤーの音で届かなかったのだろうか？　また

答えを返してくれない女性に、青年は懲りずに話しかけた。

「ねー。なんで俺のこと綺麗にしたいのー？」

ドライヤーにかきけされる事はありえない音量で声を上げると、女性に怒られてしまった。

「大声を出すな。深夜だ」

また怒られてしまった青年は、子供の様に頬をふくらませパタパタと足を動かした。麻薬常習犯は時々子供帰りをしてしまうようだ。女性は困った様に眉を寄せ浅くため息をつく、ドライヤーのスイッチを切って零すように返事を返し始めた。

「私が醜い人間だからだ。だから綺麗な物を作りたい。傍に置いておきたい。私の物にしてしまいたい……」

青年は少し潤いを見せ始めた髪をなびかせてグルリと後ろを向いた。不思議そうに首をかしげると、そと女性の頬に手を添える。

「んー。あんた、美人さんじゃん。それ整形とか？」

「そちらの醜さではない。酷い仕事をずっとしてきた私の内面が……」

「へえー。心が醜いとか、つまりそんな恥ずかしい事言つつもりなんだ？ やだねー。俺そういう事言う人大嫌い」

思わず女性は言葉がつまってしまった。こんな青年に話をしても解ってもらえるわけがないのに、何を期待して話を始めてしまったのだろう？ 頬に添えられた手を冷たく払い、女性はドライヤーとスプレーを片付け始めた。

「もう良い。晩飯を食え」

寂しそうな女性の後姿に青年は悪い気になってしまって、彼女のフオローに入ろうと考えをめぐらせ始めたが、麻薬に犯された頭は長く同じことを考えていられない。

蝶々さんの大群が襲って来たーっ。とまた大声で騒ぎ始め、彼女の家の電話が鳴り出した。





## 五話：イブ近し

女性に監禁される生活もなかなか居心地が良かった。

毎日スリや恐喝をしなくても食える飯に、暖かい寢床。身の回りの事を全てやると言っても、女性は青年を無理に押さえつける事もなかったし、また青年の趣味も尊重して服もアクセサリー類も合わせて買い与えてくれた。女性が仕事に行っている間は自由に外で遊んでいても良いし、無断外泊も時々なら許してくれる。

何よりも良いのは、高い金を払わなくても麻薬が手に入る事。

「毎日栄養あるもん食ってるからかな。なんかこの頃麻薬に翻弄される事もなくなってきた気がする」

呑気なことに、青年は麻薬が日に日に薄い物になっていっている事に気がついていなかった。真顔でそう話す青年の爪を研ぎながら、女性は良かったなと気の無い返事をして、また爪研ぎに夢中になる。十本全ての指が終わると、今度は足の爪までやってこようとしたから青年は無言で立ち上がりそれを拒否した。青年は台所に行き棚からのワインを一本取り出してコップに注ぎははじめる。ワインは女性の趣味だったが、青年もこの頃ワインが好きになってきた。今ではワインが切れると愚図るようになってしまっているから、女性は毎日のチェックを怠らない。そのかいあって、青年が愚図ることも随分少なくなった方だ。未だにテレビの予約ができていなかったぐらいの事です。ねてしまうこともあったが、それも女性が気をつけているかいあって滅多に無くなった。おかげで青年は日々を快適に過ごしている。

「道端で迷子になる事もなくなったか？」

「ん」

爪を研いでいた物を片したらしき女性は別の袋を持って台所にいる青年を追ってきた。

まだまだ初めの頃は麻薬の濃度も濃く、青年は道端で突然迷子になつては麻薬が切れる頃にやつと思ひ出して、機嫌悪そうに帰つて来ていた。

「持つていったはずのチケットが無いと言って、近くにいた人間を掘り呼ばわりしなくなつたか？」

「ん」

青年はインディーズのROCKバンドにこつていて、たびたびライブに出かけてはチケットを部屋に忘れて行き、拳句の果てには近くにいた人間をひつ捕まえ、俺のチケット返せなどと怒鳴っていた。ちなみに警察に引き渡された青年を引き取りにくるのはいつも女性の役目だった。

「歯磨き粉とわさびを間違えなくなつたか？」

「ん」

わざわざ冷蔵庫からわさびのチューブを取り出して、洗面台に持つていくとそれをブラシにつけて何のためらいもなく口に入れる日が一週間に一度はあった。泣きじゃくる青年の口に慌ててアイスをつ込むのも女性の役目だった。

「公園の池に落ちなくなつたか？」

「ん」

この寒いのに、青年はお魚さんと友達になつたから竜宮城に連れて行つてもらえると勘違いして、池の中にだいぶすることもあった。せつかく綺麗にした体をドロドロにして帰ってきた青年に女性は毎回真つ青な顔を見せて、急いでバスタブの中へ投げ込んでいた。ちなみに、竜宮城は亀が連れていつてくれるもので、池ではなく海にあるのだと昔話を聞かせてやるのも女性の役目だった。

そんなことも大分無くなつた今、女性は青年の日々の成長に感動し、また物悲しさを感じて、彼に一つプレゼントをすることにしたのだ。

「なら、コレをお前にやろう」

女性が持ってきた袋の中には最新の携帯電話が入っていて、説明書と充電器もキチンと添えられていた。青年は女性の家に来たときから携帯を所持していなかった。見た目からしてもめずらしいことだと思っただ、理由を聞けばなんてことは無い。ただたんに、麻薬常習犯は自分の物をそこら辺に置いてきては、何処に置いたかなど忘れてくる。携帯も持っていたのだろうが、何処かへ忘れてきたようだ。

しかし、今なら携帯を持たせても忘れてくることは無いだろう。そう思った女性は昨日、最新で芸能人も持っているとかで有名だった携帯電話を青年のために買ってきていたのだ。

「へー。最新じゃん」

「登録番号一番に私の番号がある。何かあつたらかけろ」

携帯電話に気をとられた青年は、せっかくだワインを飲むのも忘れて、さっそく色々試してみていた。

案外に嬉しそうな反応を示す青年に、女性は母親のような満足感を得てうんうんと頷いた。

「ん？　なんかデータフォルダに一件入ってる」

「カメラで私の写真を撮っておいた。恋しくなったらいつでも見なさい」

フォルダを開いた青年はなんと反応して良いのか解らず、苦悶の表情で画面に見入ってしまう。女性は少しも笑わずに、いつもの黒スーツでネクタイもきちんとは締め画像の中に胸から上を収めていた。何かの証明写真と勘違いしているんじゃないかなろうかと、青年は恐る女性を見上げたが、彼女はやはり満足げな顔で頷くだけだった。まさかそんな彼女に、こんな画像いらないとも言えず伺うように礼を述べると、女性は更に満足そうな顔で照れたように顔を赤くしていた。

あとでこっそり消しておこうと心に決め、青年はワインを一杯飲み干した。

クリスマスが近くなると、町は幸せそうな顔で金のかかったプレゼントを持ち歩き、ショーウィンドウから見える甘そうなケーキに気をとられて財布をすられたことにも気がつかない阿呆ばかりで埋め尽くされる。

世間一般的な家庭ならば、そろそろ一年に一度のイベントに準備を始める頃だろう。しかし女性は馬鹿らしいとでも言わんばかりに普通に生活をしていた。以外に青年の方がクリスマスを意識しているようだ。意識していると言っても、遊び人の青年はクリスマスに多くなったパーティーやら、宴会やら、お呼ばれのせいで意識せざるおえない状況であるというだけなのだが。

もともと五月蠅い事が嫌いな女性だったが、青年がクリスマスだと騒ぎ立てる事に関してはあまり不快に感じていなかった。それというのも、美しいものが好きな女性は、彼が嬉々とクリスマスを満喫する姿もまた魅力と感じていたからだ。

自分と違って友達と呼べる人達が大勢いる青年。自分と違って少しのことではしゃぎ、また怒り出す青年。自分と違って汚職に手を染めていない青年。

自分と違うものがこんなにも魅力的に感じるのだとは思ってもみなかった。

冷蔵庫から缶ビールを取り出して、リビングへ戻ってくる青年を見つめながら色々と思いをはせていると、青年は不思議そうに自分の身体を見まわした。

「なんだよ？ 何処も汚れてねえだろ？ 今日のケアは全部終わってたんじゃないのかよ？」

「別に……。何処も汚くなどない。綺麗だ」

プシュツと炭酸の弾ける音がした。ビールを一度あおる青年はどこぞのオヤジさながらに手を腰に当てると、女性の方へ首を突き出して睨みつける。

「じゃー、そんな不満気な顔でずっと見てんじゃねーよ。ムカツク

だろが」

せつかく女性が褒めているのに、青年は相変わらずつれない態度だ。しかし、それにも慣れてしまった女性は無言で青年から視線を外し、テレビのスイッチをつけた。

青年からしてみれば、つれないのは女性の方だった。

せつかくの一大イベントであるクリスマスに若い女が騒がないとはどういうことか？ ためしに遊びに誘ってみても、いつもと変わらず断りをいれてくるだけ。自分の相手をするのはケアの時と我儆なお買い物の時だけだった。仲間には良いヒモ女ができて良かったなと羨ましがられる生活であることには変わりないし、青年としても欲しいものがなんでも手に入るお姫様生活に文句などなかった。それでも最近満たされないものを感じてきたのは、女性にもらったあの携帯電話のせいだ。

いつでもかけるといつたくせに、何故電話に出ないのだろう？ 何故メールの返信をしてこないのだろう？ 別人が電話に出なくてもメールを返してこなくても、たいしたダメージにはならないだろう。しかし、青年はこの女性にシカトを食らわされることだけはどうしても納得がいかなかったのだ。

どうしてだ？ 俺を求めているんじゃないのか？ 俺が欲しいから、こんな監禁まがいなことをさせてるんじゃないのか？ 俺が心配だから携帯を持たせたんじゃないのか？

理由を問いただしてみても仕事が忙しいとしか答えることなく、その仕事はなんだと聞いても口を濁すばかり。ついでに、何故そんなに大量の飲みもしない麻薬を所持しているのかと聞いても、答えてくれることは無かった。

まんまと女性に騙された。てっきり自分は女性にとってかけがえのない存在で、いなくなると困る人で、寵愛を一身に受けるべき人間なのだと高をくくっていたのに、この仕打ちはどうゆうことだろう

か？ このフレーズだけを聞けば、青年が女性に恋をしているように聞こえてしまうのだが、それも許せない事の一つなのだ。まだ出会って間もない女に恋をするほど単純な青年ではない。なのに、電話やメール、日々の会話までシカトを噛まされてしまうと、まるで自分が女性を求めているようではないか。一人のまともそうな人間を、自分の虜にさせたと得意げになっていた青年にとって、これはプライドが大きく傷つく出来事なのだ。

イライラと手に力を込めていると、缶ビールがつぶれてしまった。中の液体は惜しげもなく青年に降りかかり、ベタベタの身体を演出させてくれた。

ベコという、尋常でない音に女性はさつと振り向き、廊下へ続く扉を指差すと機械の様に一言発した。

「風呂」

冷たい。実に冷たい。

青年は缶ビールを床へ叩きつけると肩を怒らせて部屋を出て行った。女性は動じることなく後始末に取り掛かる。

クリスマスイヴまであと2日。

## 六話：女は強し

麻薬を噛み砕く青年は酒場でぐったりとよれていた。すっかり馴染みになった光景だ。店のマスターも特に気にすることなく、店のツリーを飾っている。

しばらくすると、麻薬で良い気分になってきた青年が、面白半分でマスターをなじりだした。

「花のクリスマスも、お店に出てせかせか働く気？ やだねー、楽しみを満喫できない大人ってさ」

麻薬を噛み始めて5分後、今日も青年はいたって正常に罵声を吐こうとしている。あと5分後には取って返した様に甘えた声を吐き出すだろう、と考えながらマスターは時計をチラリと見た。

「君は、クリスマスにどうやって楽しむつもりなんだい？」

あと5分間は我慢してやろうと、マスターは気の無い返事で聞き返した。

「えー？ そりゃ、仲間と騒いで、飲んで、食って……あー、楽しみだなっ。サンタさんくるかなあ？」

「サンタさんは、夜しっかり寝る良い子のところにしか来ないんだよ、にーちゃん」

「じゃー、大丈夫だ。俺、イヴの夜は予定入れてねーもん」

いままで興味が無いと語っていた、マスターの背中がくるりと向きを変えた。

青年が大事なクリスマスイヴに予定を入れていないとは一大事だ。昨日も、一昨日も、此处で飲んだくれていた青年に寄りかかりながら甘く囁く女性達は、つまり皆、断られたと言うわけだ。これは理由をしっかりと聞かないと、此方が眠れなくなってしまうと、マスタ

「は怪訝ぞうな顔でたずねた。

「そりゃ、また…。サンタの存在を未だに信じている訳じゃないだろ？」

「信じてねーよつ。馬鹿にすんなよなーつ」

麻薬常習犯は怒りを露に、バンバンと机を叩き始めた。

「予定はあるのーつ、でも無いのーつ」

「どつという意味だい？」

話を促すマスターを気にとめず、青年はポケットへ手をつ込んだ。最近の若者は何を持っているか解らない。それも麻薬常習犯とくれば、刃物一つ出てきたって可笑しくはないだろう、思わずマスターは恐怖に身体を強張らせた。しかし、出てきたのは携帯電話だった。不機嫌な顔で、携帯の短縮ダイヤルを押した青年は、耳に携帯を押し付けて数回なるコールを大人しく聞いていた。しかし、留守番電話サービスにつながると態度は豹変し、思い切り携帯を床に投げつける。

「あーっ。なんであの女出ねーんだよつ！ くそつ、死ねっ」

「ああ、なんだ。目当ての女に逃げられてしまったのかい？」

青年の怒りの矛先は、マスターに変わってしまったようだ。マスターの推理を聞くなり、青年は酷い形相で睨みつけ、今にも殴りかかりそうな勢いだった。

「目当てにしている訳でもねーし、逃げられてなんかいねえよつ。家、帰りや二時ごろには帰ってくんた」

「あ…ああ。あのヒモ女性のことかい？」

そこまで聞いて、やっとマスターは青年が良く話題にだす女性の存在を思い出した。青年の世話をし、服を買ってやり、アクセサリ類もそろえ、魔法のようにお金を出して青年に小遣いを与える、不思議な女性の存在を。

青年のお金の使い方は尋常じゃない。毎日をばら撒くような使い



方をしている青年を見ていて、最高一ヶ月だなとふんでいたのに、青年は今ものうのうと金をばら撒きにくる。青年の身なりもどんどん良くなっていき、毎日裕福に暮らさせてもらっていることが手にとつて解るようだ。

そこまで手にかけて青年から、電話やメールがくればそれなりに嬉しいだろうに、彼の話から推測すると、一度も応対されていないらしい。

変に詮索好きなマスターは、色々順序立ててまた推理を始めた。

「もしや、その女性……。まずい仕事でもしているんじゃないのかい？」

麻薬常習犯は急に子供のようなキラキラした顔で、ふんふんとマスターの話を聞きだした。五分が経過したようだ。それをいい事にマスターの推理は続けられた。

「実はその仕事というのが売春夫の売人で、君を綺麗にしたあと、麻薬付けにして何処かに売り飛ばす気であるとか……。まともに話をしないのは、君に情が移るのをふせいでいるから……。とか」

言われてみれば確かに合点のいく話だ。あんなに麻薬を持っているのは何故だろう？ 一人身の女性が金をあふれるほど持っているのは何故だろう？ 仕事の内容が明かせないのは何故だろう？ 自分を綺麗にするのは何故だろう？

「うわーっ、まずいじゃんっ。俺、売られちまうのかよっ」

「断定はできないが、少し警戒した方が良いぞ？」

話はどんどん変な方向へずれていく。

酒場から青年はいつもより早く退散した。家に戻って女性の仕事を調べるためだ。いつも入れてもらえない鍵つきの部屋を、ドアを蹴破ってでも進入して真実を確かめてやると意気込んで帰ったは良い

ものの、玄関に女性の靴がキッチンとそろえて置かれているのを見てキョトンとしてしまった。まさかと思い、いつものリビング格に向かうと、女性がソファで本を読みながらくつろいでいたのだ。この時間は仕事にいつているはずだ。指を指してあわあわと口を動かしている、女性はチラリと青年に視線を送ってまた本の字を追いつめた。

青年はカチンときた。

また、シカトかつ。この屁っ。おかえりくらい言えっつんだ

「よお、早えじゃんか。此処で何してんだよ」

「此処は私の家だ。くつろいでいちゃ悪いのか？ 仕事がひと段落ついたのでな。今日はもう休みをもらえる」

思わず青年はギクリとした。ひと段落とはどういうことだろう？

まさか自分の売り込み先が見つかったのではないか？ いや、それより、休暇をとられては、あの秘密の部屋の中を探ることもできないじゃないか。うんうんと唸って苦面をみせる青年に、女性は不思議そうに質問を返してきた。

「お前の方こそ、今日は早いんだな。あと2、3時間は酒場で飲んで、そのあとナンパした女とホテルへ行くか、カジノへ遊びに行くはずだろう？」

そのセリフを聞いて、青年はさらにギクリと身体を震わせた。何故、女性が自分の行動パターンを知っているのか？ 帰りがいつも遅いといつても、女性よりは早く帰ってくるし、帰れない日は外泊をしているのに、何故この時間に帰るのが早いと解ったのか？

疑惑は更に深まるばかりだ。

「あんた……俺のことつけてるの？ それとも探偵かなんか雇って調べさせてるのか？」

「携帯の発信機がそう語ってくれる」

携帯に発信機がついているだなんて初耳だ。初めに携帯をもらった時は、そんなこと一言も言っていなかったはずだ。つまり、自分が何処へ逃げても良いように、内緒で取り付けたという訳か。まんまとやってくれたものだ。

「あんた、何の仕事してんだよ。俺を何処へ売り飛ばす気だつ。

正直に全部言えっ」

「……渡す麻薬を間違えたか……？」

いきなり意味の解らないことを叫ぶ青年を見て、女性は渡す麻薬を間違えてしまったのだらうと思った。毎日薄めている麻薬を、濃い物と間違えて渡してしまったのだらうと。

「麻薬……？ やっぱ、ヤク漬けにして売り物にする気だったな、てめえっ。もう、薬は止めるっ。絶対飲まねえからなっ」

今のは麻薬に魅了された人間がそうそう口にできるセリフではない。ということ、麻薬は間違えて渡していないはずだ。

となると、ますます不思議な話だ。いったい何を根拠に青年がそんな会話を始めたのかさっぱりわからない。

「麻薬を止めるとは良い心がけた。しかし、いったいどうした？

お前は何の話をしているんだ？」

「今更とぼけても無駄だぞっ、証拠は秘密の部屋にしっかりあるんだからなっ」

ついでに言っておくと、女性は青年で言う秘密の部屋の意味もよく解らなかった。しかしタツと駆け出す青年の方向に、見られたくない部屋があることは確かで、女性はサツと立ち上がり、二人が通るには狭い廊下をスルリとすり抜け、青年の先回りをした。

「お前の言っていることがさっぱり解らない。それにお前が見たがる部屋にはろくな物は置いていない」

「じゃあ、見せろっ」

青年も女性と同じようにわきをすり抜けようと試みるが、女性の瞬発力は並みのものではなかった。ことごとく青年の動きを封じる女性に頭にきた青年はとうとう力技に任せることにして、ガツと女性の肩を掴みどけさせようとする。

「女のお前にどうこうされる程落ちぶれてねーんだよっ、怪我したくなかつ…」

これは幻だろうか？ やはり女性は麻薬を間違えて渡していたのだろうか？

いつのまにか青年は床に押し倒され、天井に睨みを利かせるはめになつてしまっている。いったい女性は何処でそんな体術を学んできたのか？ やはり売人ともなると危険な目にあうのは慣れてしまっているのか？

「お前の肌に傷がつくのは忍びない。頼むからあきらめてくれないか？」

申し訳なさそうな声とは裏腹に、女性はしつかり青年のツボを抑えて放さない。青年は小柄で華奢な女性に押さえ込まれた事が恥ずかしいやら情けないやらで、子供のようにジタバタと身体を動かすがまったく効果は得られない。

せめてもの反抗として女性を睨み付けたが、その瞬間彼は息をのんでピクリとも動かなくなつた。

仕事帰りの女性の黒いスーツは前が開けられていて、なかに拳銃が仕込まれているのが丸見えになっていた。

## 七話：初めての暴行

仕事から帰った女性が仕事着を着崩して最近買った本に読みふける。あたりまえのような行動に女性は今更後悔をした。せめて部屋着に着替えていれば。銃だけでも部屋にしまってくれば。しかし今はそんなことを嘆く時ではない。何か良い解決策を探すことが正解だ。大人しくなった青年に警戒しながらも女性はゆっくりと距離を取る。「お前が麻薬に犯されていたのならまだ開放することもできた。しかし、見られたからには方法は三つに絞られる」

「三つ？」

青年は目を細めながら上半身をのろのろと起こす。女性に抑えられた箇所が痛むのか片手で色々な場所をさすっている。

「お前を鎖につないで他言させない様にするか。共犯にしてしまうか。殺すかだ」

「ど、どれも良い選択肢じゃねえなあ……」

青年はへらつと笑顔を見せてみるが、女性はそれに答えようともしない。状況が状況なだけにともいえるだろうが、もともと女性は笑顔に笑って会話を返せるようにできていないのだから期待するだけ無駄だろう。

「共犯って…売春夫を見つけて来いとか、俺が稼いでこいとか？」

青年の一言で全ての話は振り出しに戻ってしまう。女性はなかなか進まない会話にいらついているのか小さく舌打ちをした。それでも少しは青年の言わんとすることが理解できたような気がする。

「お前は、私の仕事をなんだと勘違いしている？ お前を何処かの色好きに売って儲けようとしているとも思っているのか？」

「そうなんだろ？」

これには女性もあきれるばかりだ。どこからそんな破廉恥な情報を得てきたのか。それよりも、そんな馬鹿らしい理由で今まで保ってきた青年との距離を崩さなければいけない事になるとは思ってもい

なかった。

こんなことになるくらいなら、さっさとあの部屋の扉を鉄製の物に変えておけばよかったと、女性はしてもしかたない後悔をまた繰り返してしまふ。

「もう、そんなことはどうでも良い。早く選べ」

「選べって、三つから？　ハハ…、ちよつと待てよ。こつゆつのは慎重に、ゆつくり…」

青年は勢い良く身体を飛び起こして転びそうになりながら狭い廊下を逆に走つた。

逃げたのだ。しかしそれも無駄だった。命の危機ともあつて必死に走つた青年だったが、腕を乱暴にひねり上げられ首を掴まれたかと思つと壁に思い切り押し付けられていた。女性の鋭い視線が青年を捕らえていた。けして彼女は睨んでゐるわけではない。それでも冷たい視線は十分に青年を凍りつかせる事ができた。

カチリと銃口が青年の首に添えられた。もう選択肢は与えてもらえないのだろうか？

あ、やばい。俺死ぬかも。でも……いや…

「本当は死ぬ事が怖くなどないのだろう？」

「ばっ…馬鹿野郎っ、怖いって。怖いに決まってるんだろ？」

怖いから…だから…

女性は訝しげな表情を浮かべ、垂れてきた長い前髪を首をかしげてどかせた。

「麻薬に魅了されたお前は死にたがっていた。こんなふう銃口を向ければ嬉しそうにトロンとした顔で大人しくしていたぞ」

初め青年は口許しをヒクヒク引きつらせながらも笑顔を保っていた。しかし女性の一言を聞くたびに彼の眉はひそめられていく。追求されるのが嫌だと思ひ切り態度で表しているのだ。それでも女性は聞

かなければならなかった。死にたいのなら今此処で苦しみもなく一瞬で殺してやろう。あのとき叶えてやれなかった夢を青年に与えてやろうと思っていたからだ。

「麻薬は人の本心を引き出してくる。本当は死にたいの难道?」  
青年は後ろの壁を指でさすった。本音を言うことに、そうとうなためらいを感じているらしい。

「答えを返さないのならば勝手に解釈をさせてもらう。痛みはない。次に生まれ変わる時はもうすこしまともな人間になるんだな」

「まてっ、待て、待て。死にたくない。いや……違う。じゃなくて混乱しているのだろうか。青年の言葉はおぼつかない。一言を呟くように何度も繰り返し、自分で確かめるように重くゆっくり吐いている。

不意に決心を固めた青年は、女性をしっかりと見つめて、一筋の冷や汗を流しながらしつかり言った。

「共犯。共犯が良い」

「そうか……」

静かに答えた女性は構えた銃口を下へゆっくり下ろし始めた。やっ

と死の危機も去り、青年が安堵にホッと一息ついた時だった。

腹から心臓へ駆け抜けるような鈍く低い爆音と、脳裏まで突き上げるような鋭い痛みに襲われ、青年は絶叫をあげながらその場に蹲った。

綺麗な廊下に血飛沫が上がり、今はポタポタと血溜まりを作っている。

「……つく。何して……」

痛みに涙を零し始める瞳で、青年は女性を睨み上げた。下がった銃口は彼の脚を狙い、かするほどの損傷とはいえ、銃弾が彼の脚を突き抜けた事には変わらない。

女性は何も言わず銃をしまうと、何事も無かったように青年から離れた。すぐに戻ってきた女性の手には、透明な救急箱が握られている。

る。

血が滲み出すジーンズの箇所だけをナイフで大きく裂き、テキパキと慣れた手つきで処置を始める女性は酷く残念そうに呟いた。

「せっかく、此処まできめ細かい肌に直したのにな。残念だ」

「　　っだから、何してんだっ。くそっ……痛ってえっ」

それ以外にも文句や罵声は沢山思いついたが、そんなことを言う余裕も無い青年はそれ以上声を出さなかった。無事な方の脚を立てて、膝に顔をつけると必死に痛みと戦い始める。

女性は手を休めることなく答えた。

「お前を信用できない。今はこうしてお前が逃げられない様にするのが正解だ」

経験したことの無い痛み。青年は人生の中で痛みよりも快樂の方を多くとってきた人間だ。不意に意識は途切れ、女性が信用できないと言ったのを最後に聞き取って、壁に背中をこすらせながら横に倒れた。

クリスマスイヴまであと1日。



## 八話：ターゲットは少年

青年が目覚めたのは、もう嗅ぎ慣れた洗剤が香るフカフカの白いベツドの中でだった。其処は青年の自室。女性が使っていない部屋を青年に与えたものだ。

身動きしようとして悲鳴をあげた。脚を蝕むような痛み。

「いてえ…痛い、痛い、痛い、あー、くそっ」

青年はなんとか上体だけ起こし、力任せに白い壁を殴った。大きな音に気がついたのか、数秒後に女性は悪びれる様子も無く扉から顔を出した。

「五月蠅い。壁を叩くな。隣から文句を言われる」

それどころか女性は青年にシャーシャーと説教を垂れているではないか。女性の涼しげな表情が憎らしくて、すぐに殴り飛ばしたい気分だったが、何しろ肝心の身体がそれはできないと訴えているのだからしかたない。

「お前一人で此処まで運んだのかよ」

もしそうだとしたら少し困ったことになる。案外女性は力も強いのだということになってしまつては、自分に勝てる事が一つも無くなつてしまふからだ。そうなれば自分の身の安全は保障できなくなる。

「いや、同僚に頼んだ」

同僚。それはますますマズイ事になった。呼んですぐにくる同僚がいると言うことは、近くに住んでいる可能性が高い。逃げたとしても何人いるかわからない同僚に手分けして探されればすぐに見つかつてしまふだろう。

お先真つ暗な運命に、青年は力なく壁に寄りかかった。

「あつのさあ……絶対誰にも言わないから見逃してくんない？」

「もちろん、答えに期待などしていかないのだろう？お前を信用できない」

女性はスタスタと青年の近くまで歩み寄ると一枚の書類を差し出して来た。受け取らない青年に気がついた女性はハラリと書類をベッドに落とし、そのまま出て行こうとした。

「さて」

青年の諦めた様な声が低く彼女を呼びとめた。

「何？」

呟くように聞いた青年の細い指の間で書類が踊っていた。

「読んでおけ、覚えておけば仕事の役に立つ」

青年は書類の一番目立つ箇所。顔写真らしきものをマジマジと見つめた。隠し撮りの様に撮られたその写真の中央には楽しそうにボールを抱きしめる少年と、その少年を幸せそうに抱きしめる紳士の姿が写っていた。

紳士の茶色いチェック柄のスーツと、いかにも金持ちがつけるといった片眼鏡。胸ポケットからは懐中時計のチェーンが優雅に垂れていた。

横の文面に視線を移すと、名前、出生や血液型。趣味や毎日の基本活動まで詳しく書かれているその書類はどうやら紳士ではなく少年のものようだ。お昼寝や、ボール遊びの予定が入っているのだから間違いないだろう。

「だから、何？」

「私の仕事は、邪魔者の排除だ」

青年の喉がゴクリと音をならせて唾を飲み込んだ。  
これは売人なんかよりもつとやばい。

「あんた、殺し屋？」

「違う。少しな」

「少してなんだよ？」

女性はほとんど出かけていた身体を部屋へ戻し、窓際の小さな椅子に腰掛けた。

髪を左耳にかけると、背もたれに背をつけ細い脚を組んだ。女性は部屋でもけてスカートをはかない。

「詳しくは話せない。簡単に言えば、私はとある組織のメンバーだ。殺し屋は金をつまれば誰でも殺しに行くが、私は社長の命令が無ければ動かないし、動けない」

青年は眉を寄せ、軽蔑するような視線を女性に送った。

「詳しくは話せない？ 何言ってるんだよ、俺も仕事の手伝いするんだろ？ だったら……」

「お前が信用できない」

まだ話を続けようとした青年の声を、女性の鋭い声がさえぎった。それでも負けじと文句を言おうとした青年だったが、女性がその後話を続けたため、黙る事しかできなくなってしまう。

「もし、お前が仕事に失敗した時。ターゲットに逆に捕まってしまう時。ペラペラと此方の事を話されても困るからな」

青年はうんざりと両手を上げてパタパタさせる。もういい、と何度も繰り返して女性に書類を突き返そうと差し出した。

「書類間違ってるぞ。このガキのことなんか知ってるすんだよ」

無作法に手を突き出す青年を女性は冷めた視線で眺めた。そして彼女の言葉は更に冷たさを増して世界に生み出された。

「殺すのは少年の方だ」

驚いて、舌を緩く噛んだ。目を見開き、もう一度書類に視線を移す。どう見たって少年は6歳か7歳といった年。まだ誰かに恨みを買われる年でもなければ買う年でもない。こんな少年を殺して何の得があると言っのだろうか。

「なんで、こんな」

「その少年の父親が我々に裏切り行為を働いた。今後そのような事が無いように、見せしめとして子供を殺す」

青年は書類が破れそうになる勢いでベッドに叩きつけた。そのまま書類を握り締めたため、本当に破れてしまう。

「今のは説明のつもりか、あ、おい？ イ、カ、レ、テ、ル」

歯をむき出しにして、青年は自分の頭を指差して見せた。

しかしそんな挑発に乗るのはこの青年くらいのものだ。女性はあきれたと目を細めて挑発をさらりと返した。

「仕事が嫌ならそう言え。まだ選択肢は二つも残っているだろう？」

そう言いながら女性が取り出したのは昨日と同じ拳銃だ。それを片手にゆっくりと青年へ歩を進める。

「わー、馬鹿、馬鹿っ。言ってねーっ、言っていない。お前、こんな真っ昼間から撃つ気かっ」

そう言ってから青年は気がついた。当たり前と言えば極自然な事。すぐに気がつかなかったのがおかしいくらいだ。昨日の銃声は隣近所に聞こえるはずだ。自分が大騒ぎしたくらいですぐに苦情を言いつけてくる隣の住人。彼等ならば銃声が聞こえれば何事かと管理人に報告するはずだろう。

「よし、良いぞ、撃て。いや、まて、殺すな。俺に向けるな」

女性は皮肉った口元を作って笑ってみせた。彼の言いたい事が解つたのだろう。急に撃つ気がうせてしまった彼女は、銃を懐へ戻した。「変に期待をさせておくのは同情を引くものだ。だから教えておいてやる。このアパートは我が社経営の元にある。つまり住人も管理人も同業者だ」

破れてしまった書類をベッドから取り上げ、女性は鉄製のゴミ箱の所まで持っていった。ジッポで書類に火をつけるとそのままゴミ箱

の中へ落とす。鉄製の箱の中で寂しく燃え上がる書類を、青年は更に寂しそうに眺めた。

「接触する機会はすぐ近くにある。今度この父親の経営する会社で、イヴにパーティーがあるらしい。著名人を集め自分の名を売ろうとしているようだ。其処でお前にはアパレル関係の仕事に携わる社長の御曹司として潜入してもらう」

まだ、少年殺しに加担するとも言っていない青年を置き、女性は勝手に話を進め出した。青年はうんざりした顔で女性を見る。

「また、たいそうな設定で…」

「……そのパーティーで上手くターゲットの父親に取り入り、子供を紹介してもらえ。その後、私達はちよつとした騒ぎを起こす。父親が其方に向かわなければならなくなった時、お前はその少年を連れ出して、外で待機する我々の車へ連れて来い。それで、お前の仕事は終わりだ」

「…終わりつて。殺すのはお前がやんのかよ?」

「時が来たら近くにいたものが殺る。特にだれが殺すなどの取り決めはない」

女性はなんて涼しい声で語るのだろう…青年は背筋が震えた。殺すことをそんなに簡単に考えているのか…。近くの方が殺す。そんな簡単なもので良いのだろうか。

青年が鈍い悲しみの痛みに頭を押さえた時だった。玄関のチャイムが鳴る。

## 九話：肩無しガキ大将

サツと女性が銃を取り出し、キビキビとした足取りで部屋を出て行く。いちいち客人が現れるたびに、女性は銃を用意しなくてはいけないのだろうか。不自由な身の上だなと青年は女性が出て行くのを眺めた。

少し間を置いて、部屋の外から話し声が聞こえる。一つは女性の物だが、もう一つは声変わりを終えて時のたった男の声だ。

「ゼロが連れ込んだ男とは上手くいつてるか？」

口調は軽やかで、一見伊達男のようだが、声だけで感じる風陰気には静かな落ち着きがある。かなりの年上を想像していたが、女性と共にその男が部屋へ入ってきて驚いた。

思ったよりも若い。二十代半ばぐらいだろう。驚いた青年をよそに、男と女性は話を続けていた。

「ゼロ：お前にこんな趣味があつたんだな。言ってくれば俺が以前の着せ替え人形になってやったのに」

くすくすとやはり落ち着いた上品な笑を零す男は、女性のことをゼロと呼んでいる。青年は女性の名を知らなかった。聞こうと思ったことが無かった訳ではない。けれど聞く必要が無かった。彼女は青年にとって良い紐であり、下に見るべき存在。名前など聞かなくても良いと思った。それに女性の方こそ自分の名前を聞いてこない。それに少し腹立たしさを覚えた青年は、意地になって聞かなかったことも事実。

「別に……貴方にはそんな気がまったく起こらない」

青年は少し優越感に浸った。現れた男はなかなかのハンサムだったが、ゼロは彼には起こらない気持ちをも自分には抱いている。それは、普段あまり感情を出さない女性に言われるからこそ、価値を持つ。無意識に青年は自分が格好良く見えるであろう表情で、ゼロの隣に立つ男をにらみ上げた。しかし、男は青年の視線とかち合うにつ

こりと微笑んできた。心の読めない顔だ。彼が笑顔の下に何を隠しているのかまったく解らない。殺し屋の連中はみな、こんな偽りの表情を持っているのだろうか？

ゼロも負けずに、真意の読めない表情をいつもしているから。

青年は急に体が冷えるのを感じた。

「そいつ誰」

青年は疑問を投げかけるといふよりも、少しいらだったような声で吐き捨てるように言った。恐怖心を悟られないようにと、わずかなブライドで張った声色だったが、両手はしっかりとシーツを握り締めて、かすかにふるえている。

「同じアパートの住人だ」

ああ、つまり同業者ねと、青年は目を細めた。非常によろしくない状況である。殺し屋が二人も目の前にいるのだ。命の保障はできない。

自分が今まで殺し屋のアパートで寝泊りしていたのかと思うと頭が痛くなる。

青年が頭を抱えて大きくため息をつくとき、男がおやつと眉を跳ね上げて青年に近づいた。

「え、な、なんだよっ」

青年はなおも強がった声で近づく男をけん制しながらも、そのセリフは恐怖でもってしまっている。男に馬鹿にされるかと少し心配してしまう青年だったが、男がガット自分にかかるシーツを勢い良く空へ放り投げた瞬間に、そんな小さな心配よりも身の危険を感じて起こった恐怖の方が圧倒的に勝っていた。

「なんだあ？　ゼロ。拘束具が無いならそう言ってくればよかったのに。まだコイツを殺して無いって事は、監禁して遊ぶつもりなんだろ？」

男はシーツが取り払われた青年の全身を見回しながらそう言った。青年は思わず身構えて上げた両手を恥ずかしそうにサツと下に下ろ

したが、男はそんなことはまったく気にしていないようだ。彼らの仕事柄、怖がる人間などめずらしくもないのだらう。ゼロもまったく気にしていない表情で青年に近づいてきた。

「彼は我々の共犯になるそうだ。仲間だ。アリエル」

男はアリエルとゼロに呼ばれている。青年は粹がった態度などもう知るかと、疲れきった表情で二人を情けなく見上げた。いい加減恐怖に体を振るわせるのにも疲れてしまったようだ。アリエルと呼ばれた男が不服そうに青年を見下ろしても、もううんざりした視線しか送ることができなかった。

「俺達の仕事はホイホイ仲間が増えるものじゃないだろ？ 減りはするけどな、ホイホイ。しかも着飾るしか能が無さそうなコレに？」

冗談が言えるようになったとは思わなかったよ、ゼロ？」

あからさまな嫌味に青年の文句が飛んでこなかったのはやはり疲労のせいだ。ゼロは一瞬氣遣うような目で青年を見たが、本当に一瞬なので誰も気がつかなかった。

「私が冗談を？」

「いや、言うなんて思ってないさ。でもゼロ、オレは反対だ。生かしておきたいなら監禁にしておけよ。社長にはなんて言うつもりなんだ」

ゼロに言うアリエルの声はやはり落ち着いているが、拒否を許さない迫力がこもっている。大抵の人間ならば逆らえないだらう。いや、普段はゼロも逆らえないのかもしれない。それほどにアリエルの声は勝気に満ちているのだ。だが、今回ばかりはゼロの表情も声色も動じず、アリエル以上に氣迫のこもった声で返事が返ってきた。

「監禁は彼の魅力がいちじるしく落ちるからな。出来るだけ避けた方法だ。彼は共犯になると言っている。私の手伝いをさせるだけだ。社に入れるつもりはない」

アリエルは頭をガリガリと掻き、大きくため息をついて横目でゼロをあきれたように睨んだ。まるで父親が聞き分けの無い子供にするそのようだ。



「オレにはさつぱり、この人形の魅力つてものがわからないね。だから、ゼロ。もしこの人形が少しでも足手まといになるようなことがあったら、殺すから。それは良いな？」

人形と呼ばれた青年は大きく息を吸い込んだ。アリエルが言った台詞があんまりだと思ったのだ。足手まといになるに決まっているのに、もしそうなった場合には殺すなんて、そんなのはもう殺人予告をされたようなものだ。あくまでアリエルは、可能性の話をしていくようなニュアンスだが、その可能性が100%なのだから、もしもなにもないだろう。

「そんなこと、貴方にさせずとも邪魔と感じれば私が殺る」

冷酷なゼロの台詞に、青年は更に息を吸い込もうとしてしまうが、初めに大きく吸いすぎたせいか、恐怖のせいか、上手く息は吸えずに喉だけが渴いた音を鳴らした。焦りまじりにゼロを青年が請うような目で見つめても、ゼロはまったくの無反応をよこしてくる。

街では皆にちやほやされ、喧嘩も慣れたガキ大将が、この殺し屋二人に囲まれては見る影も無い。青年はとても惨めな気分を押されて、背を情けなくうなだれさせた。

明日はクリスマスイヴ。純粹で健気な一人の少年が殺される残酷な日。あと、もしかすると一人の青年もご臨終かもしれない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1575e/>

---

「merchant of death 死の商人」

2010年12月31日02時13分発行